



朝鮮通交大紀
十

リ 5
4978
10止



門 5
第 4978
卷 10

門 5
第 1274
卷 10



朝鮮通交大紀卷之十目

海槎録次

一 関白の近侍に贈り物あるの事 或論して上使
に答へるの書ありの事

附 國書といふ國王の書のミふありの惣して

禮曹よりして外國に遣はるの書同しく國

書といふの事注して見へるの事

一 関白の行儀を觀るの事 或論して許書状に

あたへるの書有りけるの事

附書状官一行或檢察を伴の取を兼るを之に
て稱して行臺といふの事注して見一の
事

一樂工或請きたりしに志を許さずの説ありし
事

附此の時 公信使同船の格倭或して樂工或
請しめしきありし事愚按あり

一入都出都の辨ありし事

一倭人禮單に過りて朝鮮人來朝を乞ひて書

一來りしに由りて受るるさばの説ありし事

附此の時誠一等我豊臣の復書に閣下方物等
の文字ありし或争ひ毎りの事先隱峯野史
等の書に誠一ヶ事を論せし事いひまも愚按
あり附國朝五禮儀に倭使野史等 正至の朝賀
正至の會の儀あり又隣國の書幣或受るるの
儀隣國使或宴するの儀禮曹隣國使を宴を
るの儀有り考として礼或卷後に附し多り

朝鮮國外史卷之十
一 禁工匠倭の會の謝書
一 禁工匠倭の會の謝書
一 禁工匠倭の會の謝書
一 禁工匠倭の會の謝書
一 禁工匠倭の會の謝書
一 禁工匠倭の會の謝書
一 禁工匠倭の會の謝書
一 禁工匠倭の會の謝書
一 禁工匠倭の會の謝書
一 禁工匠倭の會の謝書

朝鮮通交大紀卷之十

海槎錄次

答客難答上使書

客問於余曰使臣入海今五閱月矣其未得傳命者何居余曰前阻於東征後制於營室也客曰是則然矣事有不可知者君子慮事不可不周也君何不交驩白之左右以圖之耶余曰交驩之道宜奈何曰民部卿沘印山口殿玄亮乃左右用事者而又適主客君能行禮於彼以結其心則使事可易完而歸期

亦不遠也余曰使臣銜命出疆雖_下於禮而不苟尚
慮失身而辱命况可行貨於左右乎客曰余之所謂
行禮者非行貨之謂也賓主之間必有禮幣以將其
敬茲二人者數月伴客勤亦至矣為客之道可無將
敬之幣乎余曰賓主之間果有禮幣然行之有時不
可苟也嗚呼王命尚秘芝函而先行私禮豈其禮乎
客曰行私禮為傳命也庸何傷乎余曰堂々大國之
使奉聖主明命不能宣揚威德使之稽顙於朝臺之
下其屈辱亦已大矣今又媚竈以圖其傳命則非但

使臣行私貨以乞哀也九國禮幣亦將為私貨而不
得為禮幣也古者列國之於天子亦無行貨納貢之
事而况於敵國乎而况於夷狄之邦當塲濱贈宣慰
也余之所力爭者豈徒然哉然又有可誘者時未入
都而途道相接之間亦不可無情贖此余所以終不
能守株者也今既入都則傳命之當先私禮之當後
雖三尺童子皆能知之而必欲汲汲與之者抑何意
耶不知其非禮而為之則是妄作知其非禮而猶為
之則是滋惑也其可乎噫命之稽滯雖因使臣之無

良然彼托以宮殿之未成其失在彼使臣亦無如之
何也為使臣之道但當以禮義反復開諭而已若有
一毫卑屈之事則辱命之罪始大而不可灑矣客獨
不見夫申叔舟日記乎其過周防州也欲傳書幣於
大內殿則彼以先國王受禮為未安請回還時祇受
云々彼雖蠻夷豈非知禮者乎國書尚難先受而况
於私禮乎今若設有人為執此以辭之則使臣將何
辭而答之嗚呼此一物也行之於傳命之後則為禮
物行之於今日則為貨物也客何不見毫而責我之

執拗也孟子謂陳代曰枉尺直尋者以利言之也苟
以利則雖枉尋直尺而利亦可為與今者所爭真枉
尋直尺之喻也請客毋多談為客憮然失圖逡巡而
退乃反開而為之說云

和文

客問ていらく使臣海を越へて既に五月也いよと國
命傳ふ事を得さるるのハ何ぞや余らはいく前者
関白東國を征むるにさくへらき後ハ其の宮室を營
むてい満た成さふといふよらのミ客の曰く君子の

事を慮らざる誠にあつては、いふむや驩びを
関白の左右に交へて速に國命を傳ふる事
を圖らざるや曰く驩びを交ゆるの事いふむ曰く民部
卿法印山口玄亮ハ其の左右事を用ゆるの臣なり
且彼使臣の接待を掌るに、禮物を彼處に行
ひて其の驩心を結り、使事完り易くして
帰期又遠らざるを曰く使臣ハ命を銜、疆
を出し專ら禮物を擧げて、爲すに爲る事な
らざるを恐る、其の身を失し、使命を辱

めむと、或いはむや其を賂、或は左右の人に行ふむ
や客の曰く我にいゆる贈り物ハ其の礼を行ふとの
ふして、おきり賂を行ふの事にあらず、夫は賓主の間
必ず、禮物有りて、其敬をいたす、此の二人の
それ使臣の接待を掌ると、その数月あると、使臣
にあつて其敬をいたす、禮物なるをいふむや曰く賓
主の間、誠は禮物有り、但おきを、行ふ事宜しく其時
あるを、いふや、くも為るが、さふの、王命いふと傳
へて、先私礼を行ふ、或はむや客の、いふ先私礼

を行ふ其王命を傳ふを計るが為あり曰く堂々たる
大國の使として聖主の命を奉り其威徳を宣へ
て彼を以て畏き服し我を以て來たり朝せしむる
とあたひたりて其左右に媚ひを以て國命を
傳へむとを計ふは徒ら私貨を行ふの媿川一
きたるのみにあらず其賂に多のによりて禮幣を行
ふにあらずして其禮幣を以て又私貨に頼り總
くに行ふとを得せしむるあり古く一列國の天子に
おける文貨を許さず貢を納めしむるの事ふしむる

むや其對待の國においておや又た況や夷狄の邦
においておやおよ前に坂濱においで宣慰使に
贈り物もその時余々極るおよを争ふむむあり
然も其の時おおい満た其の都においで満きに途
中においで相接を多しおよおよ贈り物もあつて
其道あるは今既てに其都においで其の國
命の必ず先にお傳ふは私禮の宜しく後に行
ふは三尺の童子も又およを知らず今其禮
に當たらずを知らずしておよを以て妄作也

其の礼に當たらざるを知りて不致ふは益不可
あり夫は王命のいふた傳ふふとあたはさゆは
使臣の過たりといふも然も彼は其宮殿を營造
していふた成らざるに托し國命を受くはとふし
おき其失彼をにあり使臣おきはむともを
事なし但使臣たるの道宜しく禮をしめておき
致反復開諭を極むるも一毫卑屈の事
ありに至たりて其の王命を辱るむは罪始め
大いあり又申叔舟の日記を見ゆは其周防州致

過不書幣を大内殿にいたさむとに彼は其國王に
先いて我の禮物を受るをもつて安らふはと一
回還の時おきは受むと致請ふ彼は蛮夷ふといふも
禮を知らざるはのとつふはむや國書はと先
受ふと致難むはむや先づ其の私禮は行ふ
おや今私禮を行ふてと一内殿のとくありとの
阿りおきをといて辞とせむ使臣何の説ありてお
きに答へむ 按子國書といふはひとり國王の書のみにあらず
すは致、禮曹よりして送る処の書いつきも
國命によりておきは外國にいたは私に贈答
をらにあらずして面して國書といふあり

其是彼是に贈り物を不_レ去_レを國命殘傳あるの後に
行ふと其ハ禮物たり去_レを今日に行ふと其ハ賄賂たり
孟子の之_レ不_レ尺を枉_レて尋を直_レくを其ハ利を之_レの
て以_レあり苟_一くも利残_レのてせは其の尺を枉_レて
尋を直_レくを之_レの又_レの尺を枉_レてと今の之_レと
こ_レの之_レ不_レ尋を枉_レて尺を直_レくを其の說も多く談を
る_レと不_レ去_レ客憮然として退_レく

與許書狀論觀光書

十月二十八日平義智伴告曰未早闕白當請_レ天宮

使臣可觀光也余曰異國光華固願見也但王命未
傳使臣義難出入也翌朝義智躬造以請足下以其
勤也遽諾之已而又過余余辭謝如昨比其去也譯
官尹嗣壽末言曰書狀今刻入都中矣余甚駭之足
下既不以牛馬走為_レ有無不相通議而行之不疑僕
雖欲獻忠得乎然對譯官極言其不可足下想亦聞
之耳足下之駕將出而闕白停行之報旋至僕之所
幸々行臺之不辱非為_レ私也越二日足下之意猶未
怠也導以軍校從以臺吏辱食催駕揚_レ過門僕其

時適坐前楹望君駟衛之盛固已心慙矣未幾足下
憮然還館詞之則閔白又停行也足下之去也獨吾
一人歎咤焉足下之還也一行亦為君耻之豈非羞
惡之心人人之所同得者乎厥後連日雨雪意謂足
下亦已悔之必不至貳過也豈料其聞諫益甚必行
已志而後已耶鄙性固滯愚陋無知高明所為固難
測識然是非之心天性也豈無千慮之一得乎請犯
數誅之戒更進逆耳之言足下試裁焉嗚呼杖節越
海今七閱月矣橫遭變故尚私芝綸此實莫大之辱

也使臣回惶鬱抑之情曷有極哉惟其若是故閔白
雖許遊觀大德一坊之外則足迹未嘗暫出茲豈非
以王命為重者哉偶然遊觀且不肯為之况未傳命
於其人而先觀其人之光華乎若果如是則是以王
命為輕閔白為重也然足下豈輕王命而重閔白者
哉不過^怖脚閔白之威而為周旋善處之計耳蓋隣使
到此而接見不時倭僧乃做出不測之言以恐勤之
一行蒼黃恟懼之狀余已知之矣但蠻夷雖不知禮
義利害則所明知也一介信使何闕於其國而敢為

拘留之計以敗百年之好乎此必無之事也金下
人之惑固其所也何圖足下亦為之怖恒恟作此等舉
措耶倭僧之言曰今茲觀光之請雖出義智實閔白
之意也閔白之意只在誇耀若不從順則還期早晚
未可知也夫足下之順悅倭心其素也僧言又從而
中之故慄々危懼惕若兵在其頸王命之重體貌之
尊漫不知為何事初則欲駕而止翌日則中道而返
今又必往乃已遑々奔命有若病風喪心之人此何
等支体耶旅之初六曰旅瑣々斯其所取災傳曰志

卑之人既處旅困鄙猥瑣細無所不至乃其所以致
侮辱取災咎也中以是觀之足下之志高耶卑耶足下
之觀光耶辱耶吉慶耶灾咎耶嗚呼足下一身雖
輕乃一國行臺也一行科正之責專在足下其任不
亦重乎繩墨其身動必以禮猶懼或失况不顧廉耻
不守禮義悞諫自用如此子思所謂無忌憚者無乃
不幸而近之耶設使閔白實有不測之計則非足下
觀光之所能免苟無其計則雖不觀光庸何傷焉當
義智之來請也亦曰王命未傳兩使不敢請也願書

狀之來觀也嗚呼彼亦知傳命之重而使臣之不可
屈也足下若又以是答之則彼非但不以為忤必且
服大國之禮義為之起敬起慕之不暇又何怨怒之
有抑有一說焉當初闕白之許遊觀也使臣其不以
未傳命為辭乎於彼則辭之於此則從之彼此無據
甚矣闕白之還都也下人欲觀光倭人其不以未傳
命禁之于前則禁之於後則請之前後反覆亦甚
矣為使臣者不能自重而惟其言是聽改如穿鼻之
牛任人前却是甚道理耶又有痛心者焉觀光之辱

若係足下之一身則已足下之辱使臣之辱也以足
下之故而使臣咸被其辱不亦冤乎若係使臣之一
身則已使臣之辱本朝之辱也以使臣之故而國家
坐受其辱不亦痛乎此吾之所以扼腕慷慨必欲回
足下之聽而扶國體於萬一者也足下不謀於人而
獨斷於心三次作行而不知止僕亦安能為足下謀
哉嗚呼義合則朋友不合則路人也自今以後各尊
所聽各行所知焉可也復何相與焉惟足下亮之不
宣

和文

十月廿八日平義智使をして告く来早関白天宮に詣侍
使臣宜しくおき哉見不辱し余答へて異國の光華
誠に見侍と成祿りふとこ詔あり但王命いふた傳つた
使臣にあつて擅ひ侍に出入りたりと翌朝義智
もつたふ至り請不足下其の再三心成いたはれによりて
遽りにおき哉許せり余辞謝を侍昨日のより既に
して詔官尹嗣壽来たりていふ書状官侍きに都中ニ
入る余甚たおき哉駭く足下既に相通議を侍とふ

くおき哉行ふて疑き侍時ハ愚忠いたさむと欲はといふと
得るよりいふて詔官に對し極めて其の不可たるを
いふおとふ不足下も又是を聞きむ又聞て足下侍きに
出てむとして関白其の行を止めむとよりて行臺の
辱しめられざるを幸ふりといふ
按：従事官こまを書状官といふより今の製述官の職に似ていふより佐畢に似て又一行を伴正をるの事を兼たり其の使として外にあるをもつておきを行其臺といふより臺ハ御史臺に比していふより佐畢齊集朝聘之使必有書状書状即古書記之任也又況書状兼為檢察自上下介至于舌人僕隸一切非違之事皆可料理其任不後二日越一て足下又先導を侍に軍官哉を侍して従ふりむるに臺史ををりて

て遽つ駕を命し揚々として門を過く僕時に
前楹に座せり其の行儀の盛ふるを見て甚たこ
きを慙たり幾くふらびして足下憮然として館
に還まり聞く関白又其の行を停めしむるや
と初足下の出るとに余獨りおき哉嘆せり足下
の憮然として返るに及びて一行の人不足下の
為めおき哉耻はといふおとふしおきを羞惡の
心人此同しく天を得るものふらびや其の後おも
へらく足下も又おき哉悔むとおもはさり其

謀を聞て益甚たしく必し其志を行ふて止むらむ
と僕固こ愚陋知るとお詠ふといへとも其是非の心
天性の同しく然るもの又千慮の一得ふるむらむ
や夫き使を奉りて海を越へ今既し七月ありな哉
いふた國命を傳ふふとあたりのおき使臣莫大の
辱あり故を重りて関白遊觀を許さるるととも大徳
寺一坊の外りて暫うくも出ておき國命を重
しと為りゆへのいひむやいふた國命を其人に傳
へてり一ツて先ツ其の人の光華を見ゆるむ

やおまき王命を軽しとして関白を重しとをばなる
然りとつとも足下は王命を軽むして関白を重
むるものふり唯関白の威をおおき姑く善く
おまきに慶せむおとを計ふの隣使あに到たり接見
いふた期あはし倭僧又不測の言を做り出し我を恐
きしむ一行の人其周章恐惶をばの事余既に詳らふ
おまき城知さる但蛮夷礼義を知らしといへとも其利
害子至たりてハ固し能く明らふおまきを知らしとの也
今一介の使を拘留し果して何れ其の國に益を

ふとお詔ありて必し其兩國百年の咄ををばむ
やおまき必しハ無たの理不利おまきなり足下は
おまきをおおきるりくのとたに至たらむとハ倭僧
いふ今おの事義智の請ふとこ極といとも其實関
白の意なり関白の意榮耀に誇ふにあり使臣
もハおまきに順^後従をることふくむハ還期いふた知不
るハおまきと足下既に倭のころに順悦をを以て
事として倭僧の言はたりくの如しよりておまき城懼
るハ兵刃の其頭ふあらわるとハ王命の重く体

貌の尊を何事たふとおまふにいとふかく初はき
に出てむとて止むり又出て中道よりして還り
今また必ず往むと欲は易の旅卦の傳にいり
志卑たの人其困に處ふ其の鄙陋瑣細至たふ
さるとお詭ふしおま其悔辱をいたし災外口を取らぬ
むろりとおまををりてふに今足下の志高しと
まろく卑しとまふり其光耀を見ふとの榮ふりと
まろく辱しめとまふり吉慶たりとまふり災咎たりとま
ふり足下の一身の輕しといふも其職一國の行臺也

其の一行を糾正をくの事專りて足下にある時ハ其
任たるゆた重し多し其身を正くして動くに
ふりて禮ををりてまろく猶恐らくハ其辱哉いた
さむとをいひむや其廉耻哉顧らんとふく禮儀を守ら
ん專りて諫に拂りていひかた用也子思のいひぬる小人
ふして忌憚らんとおまといふにのみ近き也やをて一関
白をして實は不測の計ありしめを其の光耀を見る
のよし免らざるをたに何れにし其不測の計ありし
しめを其光耀を見ふといふともた何の害かあ

らむされ^よ義智の末たり請ふ又王命い給た傳へさ
ふを以てあへて兩使を請ひ祢るくハ書状官の末たり
觀むとをとつり彼を給た王命を傳ふるの重りて
使臣のとりて屈ひ給りさるを知り足下と一能く
おき給を以て答へ彼を必り大國の禮義に服し
おきを敬しおき羨ふのいとあうさる辱しいら
む也其怨怒をふのとあむ初関白其遊觀を許
ひのと其王命いまた傳へ遊觀よいと多向さる
といふを以て答へしあふりや初おきを辭し

今ハおき小従ふ其據ふに甚し且関白の都子
還へり我々行中の下人其の光耀を觀むと羨求む
倭人うつて其いふた國命を傳へさるを以ておき
を禁し觀らしを許さるりにあふりや前子あり
てハおきを禁し後子ありてハおき羨請ふ前後反
覆給たりくのとし使臣たるとのつら重むを給と
あたり但其言のこおき聞てふ羨りの鼻羨穿て
はの牛の人子従ふて前却也くになとふおき何
事たりや夫を光耀羨觀るの辱足下の一身に係

ゆのこにあはれ足下の辱ハ亦使臣の辱あり亦
足下の也へをとりて使臣をして盡く其辱を被
らむるに至る又其辱使臣の一身に係るのこ
にあはれ使臣の辱ハ洵た我々國乃辱あり今使臣
の也へをとりて我々國家をして終ひ其辱を受
けむ誠小痛むるにありは亦亦我々腕我扼
して亦亦を嘆一必ず足下の聴を廻ら一國体
を萬一子扶むとを欲は亦也へむる然るも足下
既てに亦亦を人に謀るに獨り亦亦を断して止むる

とを義道合さゆと死ハ路人あり今よりして各其知る
所を行ふとありむのこ

副官請樂説

九月中余在搃見院平義智再度請樂余不許容有
問於余曰今茲使臣之來也朝廷必為之賜樂者何
曰以備宴用也曰宴必用樂者為我耶倭耶曰為倭
曰然則義智之請樂也子之不許何曰王命未傳也
義智且不恭也曰謂之王命未傳則使臣亦不得用
樂也其用於所館者何曰所館則可都中則不可也

何以言之夫樂之用不用初不繫於命之傳不傳故
在途接客也尋常用之何獨於所館不可乎若夫都
中則非所館之比也王命未傳之前我人出入猶云
不可況可借樂而轟於城市乎嗚呼使臣入都今
幾月矣彼不以王命為重舍置空山中無意祇受反
曰爾有其樂吾欲聽之云々其辱甚矣在閔白猶不
可散况公麼一豎子乎且義智何如人也乃我國一
藩臣也何敢不敬使臣偃然請樂乎當初來請也我
思之不審遽諾之旋復思之有大不可者存焉故論

以傳命後借之此實重王命之意也及其借樂也伶
人俱禮服以辭於余余念伶人雖賤非私人乃國人
也當命之未傳也服禮服奏技於塩奴此何等事体
也况其請樂非有宴集之事不過對一僧惟婦人以
聽之也大國之樂為一倭燕私悅身之資其辱不亦
甚乎至後日之請則尤極無禮矣義智不自使人而
令使舩格倭傳言是奴視使臣也義智何人而敢行
令於使臣耶使臣何人而又為之聽命於義智耶書
狀知其為辱必待專倅請之然後送之然亦百步五

十步之間庸何益哉余之所以爭之愈力者豈好辯
而然乎客曰子言則然矣雖然夷狄不知禮何可屑
々與較乎況義智乃我東道主人而先容於闕白者
也順其心乃所以悅之也悅之乃所以圖使事速完
也何遺大體而規々於小節若是乎余曰客之所謂
借樂無妨者其意止此而已乎曰然曰然則客亦不
免淺之為丈夫矣古之使者當國家危亡之秋單車
入虎狼之穴猶能仗義奮忠與之抗禮於片言隻辭
之間不為之撓屈矧我堂堂大國之使入蠻夷之鄉

不以禮義為重慄々然恐失其心唯其言是聽而不
能自守使臣之作果若是乎且今使臣之來非有急
於我而有求於彼也不過答夷人之誠而與之為禮
耳有何所懼而求悅於義智以失國之體耶客曰一
樂之借何闕於國體而子如是云々乎余曰奉命之
臣使於四方未能傳命則是猶處子之未嫁者也處
子未嫁而賣韓娥之歌謳以悅人則豈不為國人所
賤乎王命委於草莽不此之為痛而收天樂於都中
為悅人之資則與處子賣歌者奚擇哉一之為甚况

可再乎乞之不可况傳令乎不獨此也身在異國我
人出入寧可以暮夜乎伶人抱樂器達夜在都中無
恒者常人之心也安保其不無可慮者乎此又不可
之一端也嗚呼彼之不恭雖不足責若以命之不傳
為辭則彼亦人也豈不因使者一言而有_上所省悟乎
若果如此則傳命之前使臣踧踖之心不待言而自
著矣朱子歎夫子答王孫賈之問曰使王孫賈而知
此不為無益使其不知亦非所以取禍此非今日之
所當_下法者乎客唯々而退乃為之說云

和文

九月中余惣見院に在り平義智再たひ我樂工_上借む
とを請ふ余終ひよおきを許さば余_下問ふ者あり今
使臣の来たる朝廷おきよ樂を賜ふ_上の何の用たる
やい_下くおき其のおきを宴席に用ゆる_上為り宴必
ら_下樂を用ゆる_上の我_下為めに_上を_下倭_上の為め_下す
は_下い_上く倭を宴享に_下為り_上然_下る_上義智の樂
を借ふ_下おきを許さば_上何_下ぞ_上やい_下く王命_上い_下また傳
た_下へ_上さ_下せ_上ハ_下あり_上且義智_下おきを請ふ_上の恭_下し_上ハ_下さ_上

によりてあり王命の傳はた傳へざるに其の樂を用ひしと
いづく其の樂を館内子用ゆるハ何れやといひ我館に
有りてハ可なり其の樂を彼處に都中子用ひしむる不
可あり蓋し其の樂の用ゆると用ひざる本國命の傳ふ
るに傳へざるにありし其の樂をその途にありあ
りて客に接するのとき必し其の樂を用ひしむるに
出で館に用ゆるはむ但王命の傳はた傳へし行
中の人に任せて出入をふらば不可なりといひむや其
きに國樂を借へ其の樂を以て城市に用ひしむるや

使臣都子入ふ今幾月也や彼處我王命を以て重
しとせらるる空山の中ふ舎て置れし受ふるは
とふくしてついで我樂を借ふむと求む其我を辱
しむると甚だし其の樂を請ふは
わづら且義智何等の人たりや我國の一藩臣の
いむむ我使臣を敬ふとふくしてあて其樂を借
ふとををいふや其初來たり請ふのとき我其樂を
おとふて審ふれば遽に其樂を許さる但大いふ
不可なるものありて論は王命の傳ふるの後

おきと借さむとつふをとりてやしあり其樂を借さふ
當りく伶人禮服し余前至カ主たるより思ふ伶人
賤しといふ又國人より我私人にあらず國命の
いふた傳へさるにあたりて夫をきく禮服し樂坊塩
奴奴の前に奏せしむおき何志の事体たるや按彼まけり
國王を塩
奴といふ事注していむや其の樂を請ふ又々の宴
前前は見たり
享の事あるに阿は僧或ハ婦人おしておきを聞
りしめをりて其耳をよめおはるに過たさるの
其辱ししめたる誠ふ甚たり其の後の請ふに至た

りたカいむも極め禮あり義智其使をしておきを請は
すして使船の格倭に命してをりて其言を傳へしむ
おき使臣を見る其奴僕のしとくを承り義智何等の
人にしてあつて其命令を使臣奉行ふや使臣又何
おの人より命令を義智に聽くむや書状官又
其辱ししめたるを知り仍る其使を專らに來たり
請ふを待りておき城許さむとしつりおきいゆる五十
歩百歩の違ひたはのし余らあはれふて止さるゆへむ
あり客のいらく子りいふとこ誠不當たまり但夷狄

禮を知らば何れ必しもあまきと相多くらむ且義
智のと起ハ一行のたの寄居とこ誦りして又我々為
めよ周旋し私意を閑白小達は不意のあり其請
ひ小志たふハ其心をよ返こハハむるものよして其お
まをよ返こハハむる其使事の速う成らむおとを圖う
あり何れ其大体を遺て必ら其小節をあまきふ
くのと起やいハ客のおまきに樂を借し防^妨る所あし
といふまのうくのよたのこハハ然り然らハ客も
又淺丈夫たるお免らむ古一の使たるをの其の國

家危亡の時お當たりて單車ハハ虎狼の窟に入
る猶を能く義お依り忠を奮ひ其礼義を片言隻
辞の間おあまきおハハハ屈せよとなハハハハハ
我々堂々たる大國の使として蛮夷の國に入ら禮
義をえりて重しとせらして但其歡心を失ふハ
むとをおまき其言のこお聞起るハハ其身
を守るとあたりに且我々其危亡の事ありて
彼まに求むるにあまき其夷人の誠お答たハ
おまき使を通し其禮をいたしお過らさハハ

と何のおきかゝると何りてよ欲あいを義智子求
めむ客のいづく今一樂を借に何の國体の重を記
にありふとこ欲ありてかくのと記ふ至るやいづく
國命を奉にふの臣として隣國に使に其いまた
王命を傳へさるおきふ我いむた嫁せさるの女子のと
し今其女子をして謡ふてをりて人ふ聞りて
よりて其我を悦ぶいむむとを圖りて人を國人の
為に賤しむせふさむむや今國命いまた傳つに
おきて草芥に置くらとくおきを痛むとふ

とつりて其天樂を彼まに借しをりて其耳をよ
詠おらむむのたけけあはれおき彼の女子の謡ふ
てをりて人ふ悦びしむむとを求むるに異ふるとや
むや彼まおきを請ふの再たひに至たる既に當
たりさゆとのふしむむや其命令を使臣傳ふる
とくさゆをや且身異國にあり我々人の出入又
暮夜とをりて為るゆかひ今伶人をして其樂器
を抱たれ終夜其の都中に在らしむおき又事
の慮ふゆたふたふあらし其不可たふの一端

あり夫を彼を恭へて責むる不足とい
一とも其國命のいほた傳へき心をとりてあまに告
げハ彼を又人たり使臣の言によりて能くあまを
論さふとあむやと一然らハ其いほた國命を
傳へざる使臣暫く安かふさ心の心ほたあまをいふを
待たばしておのりあまをいふの容唯々とし
て退

。按ニ公信使同船の格倭城にて樂工を請はしめ
らき一の事あま又使臣城茂に其格倭城

て命を傳へしめらきにあらハ其初めの請ひ
求めらき一とも彼を其請ひを聞きしめ城を
いて辱むあま其同船の倭人城にて且て
よ従ひ取り計はしめらき一のあり彼を其
情を察せしめらき一かく大い怒りしめ然も
此事の類ひ又其の瑣細は過たたりしめらき
此の弊ありしめらき

入都出都辨

或有責余者曰子亦強聒者也入都出都皆有爭何

耶余曰入焉爭之爭其禮也出焉爭之爭其義也夫
奉使者之禮服敬王命也國中尚如此况異國之都
乎入人國都而不以禮服則是輕我王之命而蔑隣
國之君也其可乎或曰國中禮服為外臣祇迎也今
倭無迎接之儀而閔白又出外使者何必禮服耶余
曰君子之所以正衣冠尊瞻視乃平時持身之法也
平時尚如是况奉命者乎本朝奉使者非但祇迎時
為然在道亦禮服此何為者耶倭國雖曰蠻夷我朝
既以隣交處之其書幣皆用敵國禮使臣何可以褻

服入都耶且其禮服非尊倭國實所以敬王命也安
問閔白之存不存乎抑者一說焉嶋中之人無異坎
井之蛙今使臣之來也必想望其風采拭目相待矣
比其至也衣冠非偉然之容威儀無可則之度則彼
非但失望而已必將曰孰謂大國之使乎乃草莽眇
少之人也如是云々則於我國其有光乎於體貌其
無損乎以冬賜之才之德宜乎儼然人望而畏之矣
然造次之際尚待其修容况他國乎不寧猶是前入
坂濱也既禮服矣於外則禮服於都使服此何等奉

措耶或曰子言則似矣上使書狀既不從子言矣子
烏得違上使而獨為禮服乎余曰此則余之過也善
乎客之責我之忠也雖然亦有說為我之先禮服者
所以爭之固而示必服也及其不從也便服則衣索
已出矣此則書狀之所自擊也亦且奈何哉是日也
都人士女傾國出觀至於宮娃達官者殺闕下而瞻
前顧後衣裳草不亦埋沒乎觀光者至我前或跪
膝又手致敬如禮而其他則視蔑如也如此然後益
信修容之不可少而所爭之不為非也白衣書狀至

若出都之時則有大義存焉豈待辨說而明乎奉使
者不受國書則是事未竣也自古使臣曷嘗有事未
竣而出都者哉彼雖以堦濱受書誰我闕白在都矣
不於闕白於何受書乎使臣若據義開論則可片言
折之而但以脫身虎口為幸不顧義命空手而出此
何等使臣耶不獨此也鄙人雖無狀亦朝廷之差遣
者也處此大事而不與之通議及我之爭也邁々然
揮付之催車叱駕不許少留設使所處皆是亦非同
事之義况未必是乎嗚呼堦濱百里外地也使臣出

此則去都己遠雖有閑論之事誰與言之轉眄之頃
一旬已過而書契尚未入手相與咄々書空而已臍
可噬乎以是觀之今者所爭孰為禮孰為義耶
之餘仍為辨以俟後世之子雲云

和文

余哉責ふそのあり都に入り都を出るに争ふと何
ぞやいらく入ふとれふして争ふ其礼を争ふり出る時
ハして争ふ其義をあやぢふなり夫を使を奉じて礼
服をふハ我々王命を敬ふは又むあり我々國中に有りて

ふ然りいむや人の國子有りて礼服をふは我々其王命
を輕むして是りて隣國の君を蔑しはにをふありいらく我
國中ふありて礼服をふは其の外臣の祇し迎ふふに
てありいむや人の國子有りて礼服をふは我々其王命
を輕むして是りて隣國の君を蔑しはにをふありいらく
我國中ふありて礼服をふは其の外臣の祇し迎ふふに
よりてあり今倭人使臣を迎接するの事ふくして閑白又
出て外有り何ぢ必ふれしも礼服をふは我用いむ余
いらく夫を衣冠を正しくし瞻視を尊くするハ君子

身を持ちの大法あり平時を然りいむや國命を奉に
ふおや又我國其使を奉に子の臣但外臣の祇に迎ふ
るの爲ふして礼服は子のいふに途中にありといふも又
礼服を倭誠子蛮夷ありといふも我の國既に隣交
をせりてあまに處し書幣に至たりて尚た其對待の礼
を用ゆる時ハ使臣いむや便服して其都不入ふむ
や且其礼服を用ゆる又倭國を尊ふにあまに實ハ
我の國命を敬ふゆゑむあり閣白の外子有はと有さる
とを問ふるむや且一説有り嶋中の人誠に井蛙に異

ありとあり今使臣の來たる必は其風儀を想像し目
を拭て相待たむ其至たるに及いて其衣冠を見るに
偉然たる容あり其威儀に至たりて又法とるむたの度
ありらめハ彼を其の望むを失ふのみにあらはた
我國の光耀とるむや尚た使者の体貌にたひ
て損を事ありといふむや且先を堺濱に入
ゆのと既てに礼服たり外にありて礼服都に
入ゆと死にいて便服はあま又何等の舉措たるやい
はく子らいつとと詠ハ然り志も上使に遠ふて獨り禮

服を履らむや余はいはく古き誠にあやむるなり然も其
説あり余は上使ふされたちて禮服を穿必らば其禮
服に履れを不履のへむあり其終ひに我々のふと古
詔に従うるにして便服をむとを海に當りて衣箱既て
に出たり古き書状官の親しく見ゆるところあり然も
此の日都人士女國を傾きて出て見ゆ其我々前に至
たる時ハ膝を跪き手杖又一敬を以たりと禮の如く
して其他ハ古きを見て蔑りとて古たにおひて益
其の容の修むるを果して其非たぶさる故信せり

古の時ふたりて彼の白衣したり書状官を以て悔め
とも益ふたのこ其都を出づるの事ふ至りてハもつとも
大義ありて然り夫使臣として其答書を受けざるハ
古き其使事いまだ畢らざるあり古より使たるの人と
て其使事いまだ畢らば遽らば其國都を出て去る
之のありや彼を堺濱におひて答書を授けむといふ哉
を以て我を誑くといへとも然も関白其都ふあり古
きを関白に受らむとふくして悔たいのきにおひて
り受らむ此の事使臣をして義に據りて開論せしめハ

片言しておきて折く處し然るも其の身成虎口に脱を
るを乞ひて幸いありし義命を顧むることなく手成
空しくして出て去ゆおきて何の義たるや且鄙人不肖
たりととも又朝廷の命して使せしむるものありおの
大事に當りて曾て我と相議にふとふくゆた其おきて
まを争ふに當りて速う百事を催して出て去り暫く
も留むるしめはおきて其處にるといふを以て果して盡
く是ふしむとも又かの事を同じくを以の義にあは
いむやゆた其是ふとさうおや抑堰濱八國都を去り

て百里外の地より使臣出て去に至たる其國都を去
ると既に遠くゆたおきてを問諭せゆ欲はといふともゆ
かひ今一旬既に過れて答書な候いた至る終
ひに相與し嘆息するものいふおきて候ていふに其相争
ふとこの果していつまら其禮義を得たりとを以や姑く
おきてを出しを以て後世の我り心を知ふ人を待つの

倭人禮單志

入海之後受職倭人争致下程使臣一皆受之而行
回禮所以答向國之誠也七月中行到堰濱之引接

寺有西海道某州某倭等送禮單其書曰朝鮮國使
臣來朝云云余初失於照管因修日記而覺之招活
官曰倭饋已受乎曰受矣倭使已去乎曰在矣其食
猶在乎曰分矣即令陳世雲告上使書狀曰倭人以
來朝為辭辱莫大也辱身且不堪况辱國乎辱國之
食斷不可受而始不致察至於分饋下人將若之何
上使曰夷狄之言何足較乎書狀曰吾則初已覺之
而無知妄作也且置之耳余奮然曰夷狄雖無知使
臣亦無知乎古人於取與之際一毫不放過惟其義

而已吾輩為使臣而受辱國之食則其義安在哉余
觀倭饋皆市貨之物也初雖誤受今若照數貨還曰
汝禮單失辭既覺則義不可仍受故即令市給可歸
報爾主云則辭嚴義正可洒其辱也上使書狀曰業
已受之至於分饋今何可屑焉余曰貨給雖似屑
然留食則甘其辱也還之則洒其辱也何不可之
有况必為之貨給者所以示名義之至嚴也其處置
不亦光明正大乎上使書狀乃許之即貨還而具道
其由使者曰吾儕小人不解僕字到此倩書於人雖

措語失辭非吾主所知也今承明教不勝慙懼但小的奉吾主之命而見却放使臣將何以歸報耶請使臣容改書領留為都船主又使人曰彼以番文未呈余令翻之而余亦不分魚魯致令寫手失辭罪實在我非彼所知乞貫余罪為上使書狀曰使者吐實如彼都船主自訟又如比客主之間豈無人情姑受之何如余猶難之而不能終執也時余適入醉鄉書狀戲謂典籍曰副使之肯從乃歡伯用事也不然其偏性殆難回也余聞之相與一笑而罷至月十一日使

臣重到引接寺西海之肥前州源久成等來致禮饋其書辭又如前倭為世雲私謂使者曰前者某倭失辭使臣已揮之矣安可以此等書呈于使臣可速改也已乃入告于余余曰世雲之罪可杖也書辭如彼則宜告使臣以聽處分而徑自却之是世雲為使臣也欲杖而止翌日倭人改單以來余謂上使書狀曰西海之倭前既失辭而使臣却之不嚴故今又如此其辱尤大矣請不受何如上使書狀曰前則親見其書故可却也此則使臣之所不見也待遠人理宜包

荒黑白何可太分明也余曰不然世雲之見即使臣
之見也其可受乎暮夜投金而謂人不知不可也掩
耳盜鐘按見能改齊漫錄而謂人不聞不可也然則心實知
之而外若不聞可乎三者事異而其自欺則同何不
思之甚也且係使臣之一身則包荒猶可也此則辱
國大矣使臣既不能華國及欲包荒於辱國乎書狀
曰前許改書而受之此又改書矣前後二三其德可
乎余曰前則至於貿市而却之義至嚴矣都船主又
自當其罪故可電勉從之此日之却乃世雲也非使

臣也世雲已却而使臣悶默受之則是義行於世雲
而不行於使臣也不亦可羞之甚乎嗚呼却此食而
至於激變則上使書狀之言是或一道也却一朝倭
之食有何所關而不顧禮義如此耶彼倭誠無知固
不足與較一國之倭豈無解事者乎却一倭食甚微
而暴義於一國甚大此非處事之善者乎今行許多
所失都在怖歎二字上故卑污屈辱之事隨日輒生
不可彈數真所謂羞之毫釐謬以千里者也及覆爭
辨而終莫之回余不得已請於回禮時不書副使且

不分食於從者上使書狀乃泛書通信使而不列余
名其所分酒食余不受令倭人等啖之噫上使書狀
實專對之才也講明義理之日有素豈胡乱處事者
乎今次辭受之節必有義也姑記淺見以俟智者云

和文

海峽越ゆの後受職の倭人争て下程を以て使臣
とふおきを受けておきり回礼を行ふ其の我國に向
ふの誠は答ふおむむり七月中行きて海濱引
接寺に至る時西海道某州の某倭禮單を送る

其書小朝鮮國使臣来朝といふ余其日記を修むるに
至たりて始めておきけ覺るより譯官に問ふ倭の饋物既
てに受ふといはく受けたり倭使既に去ふといはく去
らば其食ふ哉あるといはくおきけ行中に分てり陳世
雲とて上使書狀に告げしめて倭人來朝哉を以て
いふことをふら其辱しめ莫大とを辱し身と辱しむる
たも不可なりといはむや國を辱しむらにおいておや國哉
辱しむるの食尖て受く魚の初のおきり察はると
を以たを饋物を下人よ分つふいたるいむ上使のいはく

夷狄の言何や必しも相較ふるに足らむ書状のいごとく
余初め既てにおき哉覺せり但其無智妄作たるを乞
つておきを問はさるのみ余奮然としていごとく夷狄固と
に無智あり使臣又無智ありむや古人其取與の間に
不當りて但其義の在ふところのいごとく我輩
使臣として國を辱りしむるの食を受ふとたは義に有
りていごとくたるや倭の送るところをみるふも市に買ふ
の物なり初めの過りておきを受くといへとも今其の
數北とく買ふておき哉還して汝の禮單其辭を失

り初め過りておきを受く今おきを覺とらるとたは
義にありて受く處なりよりて買ふておきを還せり
歸りておき哉を以て汝の主に報はるべきといへく辭嚴
にして義正し之りて其辱を洗はるべき上使書状同一く
いふ先起既てにおきを受け其饋を從者不分明
に至る今何ぞ必しもくのとたふ至たむ余もいへく
買ふておきに還し給は不誠に瑣細なるに似たりと
いへとも然も汝の食を留むるは其辱に安むるを
ありおきを還は其辱を晒くあり其買ふておき

に還し給を其名分の正しくはる義の苟しく
之を魚かきさを示はむむるはた光明正大あ
はやくにおひて上使書状皆あきを許せりよりて
買ふてあきを還し給して具ふ其由を告るむ使
者のいづく僕漢字を識らば此所に至たりて書を
人に請ふ其辞を失ふとあき我々主の知ふと
あはれにあはれ今明教を承りて慙懼ふ勝る但僕
我々主の命を奉り使臣の爲めに却ぢけらふ又
何をとりて帰り報む使臣願くは其改書しをり

て呈を海を許しあはれ領留を給へと都船主ま
人をしていひていひ彼を國字ををりて書し
来たる余漢字ををりてあきを翻譯せりめ
余又魯魚を分たば終いし寫手をして辞を
失ふはむらに至たる其罪余に有り彼をり知
はると海にあはれ願くは余の罪を免ふせ上使書
状のいづく使者實を吐くと彼をり如く都船主
のわら責るはたらくの如く客主の際いりて人情ふ
うらむ志いづくあきを受けむと如何余猶をあき

成難れむして終い其説を遂くうとあたはれ且
其の時海に酔り書状戯述に典籍に謂て副使
の余り輩のいふに従ふ其酔へるに當きハあり然
らばむハ難からむ余あきを聞て同く一笑して
止たり十一月十一日使臣泊た引接寺に至たり肥
前州源久成等来りて禮饋をいたし其書辞又前
倭のとて世雲私に使者告ていらく先紀某の倭
書辞を失せり使臣其饋を受けに宜く速くにお
きを改書に處し既てにして其事を余に告く余

いらく世雲の罪杖うのむし彼れ其書辞を失せハ宜く
あきを使臣に告げて其處置を聞く處し今あきを
使臣に告ぐ系となく我輩に代りて直に之のいからあき
成却れくあき世雲使臣たるむ杖うたむとて止
しぬ翌日倭人禮單を改ため来きり余上使書状に
謂ていらく先紀西海の倭其書辞を失して使臣あ
きを却れくふと嚴ふに之ををりて今まこり
ふのとて其辱らるめ尤も大ひなり今宜くあきを
受けさる處し上使書状のいらく先紀ハ使臣親しく

其書を見ゆゆ(と)をよめて却ぢく辱し今ハ使臣の見
さゆ処あり且遠人を待いの事宜しくおまを寛容
に辱し必しも其の黑白を分明にも辱し余ら
然らむハあらし世雲り見ゆおま使臣の見りに同し
夫は暮夜に金を人に與へて他人の知ふとふしと
し耳を掩て鐘を偷む人の聞く事ふしといふ今實
ふおまを知りて聞けさゆりしとくはおまのこのを其
事同一かゆれといふとも其よりかゆ欺むくたるハ同し
此のし且事使臣の一身子係るゆらふを寛容を

ふして今此の事に至たりてハおま國を辱しむるの大い
ふるとのあり使臣既てに國の光華を増はとあたは
りておまを寛容して國を辱しむるや書状
のいらく先記既てに改書しておまを受けたり今おま
許ささゆ辱しむや余ららく先記ハ買ひ給してお
まを却ぢく辱し至たる又都般主のゆら其罪ふ當
らありい勉めて従ふ辱し今おまを却ぢく辱し
世雲りを辱しと詠にして使臣のゆら処あり
又世雲既におまを却ぢけて使臣のゆらしておまを受

かたは其これを却けくるの義世雲より行ハキ
て使臣より行ハキさるあり羞ハるたの甚なりとい
る一且此の食を却けてせりて激して変を生を
るに至たりしめ上使書状のソふと云又とくハ
一道といはる一今一朝倭の食を却けくおま何
の重れふ係係と云云ありて其禮義を顧見さふの
おに至たゆや 按：彼ま我々國受職の人をいいて朝倭と
まら其の末朝の倭人の義あり
倭誠ふ無智あり相較くらふる不足といくとも一國
の倭を擧りて盡くす其の事理を知らさふるを

や一倭の食我却けくゆ事の微一たふるたのにして義
を一國ふ示は其関りゆ処の大いあるものあり今此の行
其辱らしめを受るの多きをのい但りの死を怖るの二
字よりしてらくのとたふ至たるのいおまを相争ふて給 終
ひよ余らふ処を聞る屋むことふく其回禮の時副
使を書きゆとふく又其食を従者ふ分のとふら
むと請ふ上使書状但通信使と書して余ら名を列
せは又其分の酒食倭人おをしておまをくらハ
しむまき上使書状ハ義理を講明すゆの人あり

此の事必_レ其義あ_レむ姑_ク浅見を記して之_レを
て智者_ニ待_ツの_レ

按_ニ誠一_ノ人_トあり黄許_ク類_ヒあ_レはと_レも
又甚_ク高慢_ニ過_レた_レて自_カは是_レありと_レ人言_セ
納_ハた_トふ_レと_レりて事情_ニ疎_クふ_レは_レ至_リたり
一_ノあり其功罪相當_キとい_ハひ_ハ鶴_ノ峯_ノ集_ニ
黄允吉_等在_リ界濱_ニ留_リ半月_ニ而書契_始至_リ辞_甚悖_慢
至_リ以_テ殿_下為_リ閣_下以_テ所送_レ禮幣_為方物_領納_ス又_有下
一_ノ超_レ直_レ入_リ大明國_貴國_先驅_レ入_リ朝_等語_誠一_ノ據_レ義

却_レ之作_レ書_與玄蘇_曰如_レ不_レ改_レ此_等語_使臣_有死_而
已_義不_レ敢_レ还_レ玄蘇_詞屈_答書_許改_レ閣_下方物_領納_ス
六_字至_レ超_レ入_リ大明國_先驅_レ入_リ朝_等語_則諉_以入_レ朝_大
明_終不_レ許_改上_使書_狀皆_信其_為然_而不_レ欲_再
請_誠一_正色_折之_復貽_書玄蘇_爭之_上使_書狀_既
幸_其許_改閣_下方物_等語_又恐_激變_生事_誠一_又
送_書宣_慰使_率行_長及_玄蘇_言各_守封_疆世_敦鄰_好
且_不可_借路_攻明_之事_極其_反復_而一_行之_事
制_在上_使書_狀又_與之_合為_誠一_終不_レ得_行其_志

憤以其書投于洋中因作詩有水底魚龍應識字
之句云々_レ 滿大懲誌錄。我使將回不時裁答令
先行誠一曰吾為使臣奉國書未若無報書與委
命於艸莽同允吉惧所留邊發至界濱待之答書
初至而辭意悖慢非我所望也誠一不受改定數
次然後行允所經由諸倭贈遺誠一皆却之允吉
還泊釜山馳啓情形以為必有兵禍既復命上引
見而問之允吉對如前誠一曰臣不見其有是因
言允吉動搖人心非宜於是議者或主允吉或主

誠一余問誠一曰君言與黃使不同万一有兵將
奈何曰吾亦豈能必倭終不勦但黃言太重中外
驚惑故解之耳然々隱峯野史別錄の云々據
と紀名庚寅春黃允吉金誠一許歲等自釜山越
海三月而入日本國都入國都五月而始見平商
傳國書四日而出都出都二十日而答書至此書
初有閣下方物入朝等語允吉等貽書玄蘇請改
六字則蘇即馳啓改閣下方物四字入朝二字則
不許曰此朝字非指貴國也乃指大明也允吉等

以其言為信惟誠一不以為然與玄蘇往復論難
蘇猶不聽又云允吉箴及一行上下大小人皆以
為賊國大舉獨誠一謂賊萬無末理平首又是庸
常底人物廟堂以誠一為善使陞堂上悉罷防備
諸事允吉所帶軍官黃進不勝憤忿於眾中揚臂
大言曰以黃許之愚劣賊情尚能知之况以誠一
之慧點點豈有不知之理乎此不過書契中多有犯
上國不通之語而無一言受來故誠一恐其得罪
巧為如是之言寧陷於不知之地其心罔測矣欲

上疏請斬而為人所抑止蓋誠一之留日本也與
黃允吉許箴論國分寺被辱答客難論觀光論拜
庭下堂副官請樂入都出都倭人禮單志等七書
往復論難其答玄蘇前後書力爭閣下方物入朝
六字答宣慰使對馬島主兩書極言大明之不可
犯辭語痛切誠一之得名善使其以此也然答宣
慰對馬兩書非真答乃擬作也有目者無不洞見
其心而當時滿朝諸臣徒知偏黨不計宣慰對馬
兩書為擬作大言誇張反為之善使識者皆以為

文人諸名士及不如一武夫黃進相與唾罵之又
云時朝廷疑賊未寇通信使未還前分遣各道助
防諸將預為防備之策及信使還廟堂偏信誠一
之言悉罷防備事明年壬辰夏四月平首大莽入
寇十三日渡海陷金山翌朝進陷萊萊府使宋象
賢死之廟堂罔知所為相顧錯愕面無人色上大
怒曰為金誠一所誤國事至此其令誠一急下嶺
南禦賊誠一惶恐即日癸程上不勝憤怒後數日
令禁府都事李通還拿誠一束致闕下時誠一自

湖西由全州南原雲峯迂下嶺右通自京直下至
嶺界路塞不得達而還云々とあり參へ考ふる
又按我國使朝鮮に至る時彼國我使哉一々庭
拜哉いたさむるの事國朝五禮儀に見一あり
其の正至朝賀の儀諸方客使位於懸之東西倭
使在東野人在西當文武班准只序立日本琉球
等國使副當從二品班若諸島倭使上副官人當
從五只班押物船主當從六只班伴從人當正七
品班又正至の會儀倭使在東西上野人在西東

上若有日本琉球等國使副及應別待者則在殿
內及階上東西班之末と見へたり又隣國の書
幣受ふの儀あり注して隣國ハ日本琉球國
の類ありといつり曰前二日禮曹宣攝内外各供
其職前一日掖庭署設御座於勤政殿北壁南向
設寶案於座前近東香案二於殿外左右掌樂院
展軒懸於殿庭近南北向設祿律郎奉麾位於西
階上近西東向其日典儀設待臣位於殿庭東西
俱每等異位重行北向相對為首使者位於道西

重行北向東上階上典儀位於東階上近東西向
左右通禮階下典儀位於東階下近東西向贊儀
別儀在南差退又贊儀引儀位於西階下近西東
向俱北上引儀設待臣門外位於永濟橋南東西
如常使者位於勤政門外道西重行東向北上設
使者次於朝堂近南鼓初嚴兵曹勤諸衛陳鹵簿
半仗於正階及殿庭東西勤政門内外列軍士並
如式司僕寺正陳輿輦於殿庭中道小輿在北
天輦次之御
馬於殿庭中道左右各一匹
相向仗馬於文武樓南六匹

在隆文樓南六匹侍臣以常服俱集朝堂使者以
在隆武樓南相向有案書
下就次禮曹正郎受書幣入陳於殿階上在北幣
在鼓二嚴侍臣就門外位諸護衛之官及司禁各
具器服尚瑞院官捧寶俱詣思政殿閣外伺候左
通禮詣閣外俯伏跪啓請中嚴殿下具翼善冠袞
龍袍御思政殿繖扇侍衛如常儀近侍及執事官
先行四拜禮如常典樂師工人入就位悛律郎入
就位悛律郎入就攀麾位鼓三嚴執事官先就位
引儀分引侍臣由東西偏門入就位引儀引使者

以下就門外位每使者行止皆通事指導鍾聲止闕內外門左
通禮俯伏跪啓外辨殿下乘輿以出繖扇侍衛如
常儀殿下將出伏動鼓吹振作將入殿門悛律郎
跪俯伏攀麾興工鼓祝軒架樂作鼓吹止殿下陞
座爐煙升尚瑞院官捧寶置於案繖扇侍衛如常
儀協律郎跪偃麾俯伏興工戛鼓樂止諸護衛之
官入列於御座之後及殿內東西承旨分入殿內
東西俯伏史官在其後次司禁分立於殿階上典
儀曰四拜輦儀唱鞠躬四拜興平身凡贊儀贊唱皆兼典儀之

辭侍臣鞠躬樂作四拜興平身樂止回班相向立
臨時引儀引使者以下由西偏門入就位贊儀唱
設位鞠躬四拜興平身使者以下鞠躬通事樂作四拜
興平身樂止傳教官出取書入啓承教俯伏興由
東門出臨階西向立宣教曰迎客使陞殿通事跪
俯伏承傳興引使者由西偏階陞入詣前楹間跪
俯伏在庭伴從皆跪殿下問國王又勞使者訖使
副俯伏興出門伴從俯伏興平身通事引使副出
伴後隨出侍臣俱復拜位贊儀唱鞠躬四拜興平

身侍臣鞠躬樂作四拜興平身樂止左通禮陞自
西偏階進當座前俯伏跪啓禮畢俯伏興降復位
協律郎跪俯伏舉麾興工鼓祝樂作殿下降座乘
輿繖扇侍衛如末儀將出殿門鼓吹振作服律郎
跪偃麾俯伏興工憂故樂止還思政殿鼓吹止引
儀分引侍臣出若諸島倭及諸衛野人酋長親朝
獻幣與使人獻書幣則隨百官朝
見如又隣國使戎宴の儀有曰受書幣禮
畢典樂師歌者及琴瑟入立於懸南典儀設使者
位於御座西南東向北上不陞殿者位於殿庭道

西近南重行北向東上設使者以下邦位於道西
重行北向東上司饗院設酒亭於殿內近南北向
設使者酒卓於殿外近西執事者設不陞殿者酒
卓於其前通事引使者以下皆就門外位諸護衛
之官各具器服詣思政殿閣外伺候左通禮詣閣
外俯伏跪啓請中嚴典儀贊儀引儀先入就位左
通禮俯伏跪啓外辨殿下具翼善冠衣龍袍象輿
以出繖扇侍衛如常儀殿下將出仗動鼓吹振作
將入殿門振律郎跪俯伏奉麾興工鼓祝軒架樂

作鼓吹止殿下陞座爐煙升繖扇侍衛如常儀
振律郎跪偃麾俯伏興工戛故樂止承旨入殿內俯
伏於御座左右史官在其後引儀引使者以下由
西偏門入就位典儀曰四拜贊儀唱鞠躬四拜興
平身使者以下鞠躬樂作四拜興平身樂止傳教
官進當座前俯伏跪啓傳教俯伏興由東門出臨
階西向立宣教曰迎客使陞殿宣訖還侍位通事
跪俯伏承傳興引使者由西偏階陞就座其不陞
者亦引就座司饗院提調進饌案進案由御座南

階微案由東階

樂作提琴設使者饌卓於不陞殿者執事者為之後同樂止近侍
進花樂作執事者散使者花樂止典樂師歌者及
瑟琴分東西偏階陞就位提調詣酒亭東酌酒第
一盞樂作九曲舞臨時稟旨捧詣御座前跪進九進盞退盞皆由南
階內侍傳捧置于案提琴行使者酒琴訖樂止進
盞樂作琴提調進湯九進湯由御座南階退則由東階樂作提琴
訖樂止
設使者湯食畢樂止凡進湯樂作食畢樂止酒行五遍每行酒後
設提調進大膳樂作提琴設使者膳樂止提調進
徹撤案提琴徹使者卓通事引使者以下俱復拜位

贊儀唱鞠躬四拜興平身使以下鞠躬樂作四拜
興平身樂止引儀引出左通禮陞自西偏階進當
座前俯伏跪啓禮畢俯伏興降復位協律郎跪俯
伏琴麾興工鼓祝樂作殿下降座乘輿繼扇侍衛
如末儀將出殿門鼓吹振作招律郎跪偃麾俯伏
興工憂故樂止還思政殿鼓吹止左通禮俯伏跪
啓解嚴兵曹承教放仗○若不親宴則命內侍宴
于西廊若諸島倭及諸衛野人酋長典使人則命內侍饋于南廊如常又禮曹隣
國使次宴をすの儀有り曰前二日禮曹宣攝內外

各供其職其日執事者設押宴官及判書座於正

廳東壁西向北上有兼判書則參判差後參判有

議並正使副使座於西壁東向北上交從事官

交椅於使者之後重行伴從於階上重行並繩又

設酒卓於廳內近南北向伴從酒卓於其位之前

典樂設樂於前楹外使者將至押宴官以下各就

座前立使者由西門入陞廳就押宴官及判書前

控首再拜凡使者行禮皆通事指導押宴官及判書稍前頓首

答再拜次與參判行禮如上訖就座前立次從事

官從庭下陞就押宴官及判書前頓首再拜無答禮

次詣參判前行禮如上訖俱就座伴從從庭下陞

就前楹外重行東向北上頓首再拜稍南又再拜

訖退就座前立執事者設饌卓如常凡設卓及勸

樂皆奏執事者以盞酌酒進押宴官前押宴官出座

稍前立判書以下亦正使以下皆出座稍前立押

宴官執盞揖授正使正使答揖執盞請酒又與押

宴官揖押宴官答揖正使飲訖以盞授執事者乃

揖押宴官答揖執事者以果盤進正使前凡賓主

飲訖執

事者以果盤執事者又以盞酌酒進正使前正使
立進執盞揖授押宴官押宴官答揖執盞請酒又與正
使揖正使答揖押宴官飲訖以盞授執事者乃揖
正使答揖次與副使行酒如上次從事官就押宴
官前躡受飲訖次押宴官與判書參判行酒如式
各就座執事者進花設湯酒行五遍初盞後設各
呈盃行酒皆
設湯三行後許伴從坐仍徹卓使者以下起押宴
設卓及勸花行酒設湯
官以下皆起而送○宴諸島倭及諸衛野人酋長
與使人則判書北壁參判東壁參議差後並交
椅客

人西壁繩床客人就判書參判前頓首再拜並無答
拜首長若官高則設各呈盃以飲如常無行酒之
從從獲答一拜
禮禮と見へたり今考とて今考とて成卷後に附不

